

# ペルシア語の後置詞-rā について

宮 田 泰 雄

## 序

現代ペルシア語において、小辞 -rā (以下単に rā) は唯一の後置詞であって、その主な機能は限定された対格目的語の表示とされている。またこの小辞は、古くは種々の与格的表現にも用いられていた。このように rā は一般に対格・与格表示機能を有するものとされているが、この小辞を詳細に検討してみると、従来のような「格表示」説では、十分に説明しがたい実例に数多く接するのである。

そこで、本論文では、この小辞に潜む特性をとらえ、その本質的機能がいかなるものであるかを、「格表示」説とは異なる角度から究明してゆきたいと思う。

## 本 論

近世ペルシア語最古の散文作品の一とされている Bal'amī の歴史書 (A. D. 964) をはじめとして、それ以後の古典作品を通じ、現代語に至るまで、rā は、与格的表現におけるよりも対格語とともに用いられるほうが、はるかに多い。ただそのような対格優勢のなかにあつて、Sa'dī (A. D. 1184?—1291) の手になる代表的古典『薔薇園』<sup>ゴレスターン</sup>では、逆に rā の与格的用例が対格のそれを、わずかながら凌駕している<sup>1)</sup>。『ゴレスターン』では、rā を与格的表現に、より多く用いているばかりでなく、その使用例は他の文学作品に比して、きわめて多彩でもある。そこで、まずこの『ゴレスターン』における種々の与格構文に詳細な検討を加えてみよう。

\*

\*

\*

[I] rā が与格として最も多く登場するのは <— rā ~ būdan> 「—には～がある」で、動詞 būdan 'to be' とともに用いられ、「所有」をあらわす構文である。

(1) *yaki-rā az vozarā' pesari koudan būd.*<sup>2)</sup> (Gol. Ⅱ—1<sup>3)</sup> 「ある大臣に愚かな息子がいた。」——この構文で、動詞 *būdan* の主語に動名詞 (verbal noun) が来ると、*rā*によって示される語句がその意味上の主語になることはいうまでもない。(2) *kasi-rā dar zamān-e ū bā ū emkān-e moqāvemāt na-būd.* (Gol. Ⅰ—27) 「当時、誰も彼に対抗する可能性がなかった→誰も彼に対抗することができなかった。」(3) *vazir-rā bā vei ġarazī būd.* (Gol. Ⅰ) 「大臣には彼に対する恨みがあった→大臣は彼に恨みを懐いていた。」

〔Ⅱ〕 〈—*rā* A B *būdan*〉「—には、にとって A は Bである。」(4) *hūrān-e behešti-rā dūzax būd e'raf.* (Gol. Ⅰ—7) 「天女には、煉獄も地獄だった。」(5) *šāhanšāh-e 'ādel-rā ra'iyat laškar ast.* (Gol. Ⅰ—6) 「正義の王にとって民草は軍隊である。」

〔Ⅲ〕 現代ペルシア語では、前置詞 *be* (時には *bā*, *bar*, etc.) を要求する動詞とともに。とりわけ, *goftan* 「言う」; *dādan*, *baxšidan* 「与える」; さらには *porsidan*<sup>4)</sup> 「尋ねる」; *āvardan* 「もたらす」; *oftādan* 「ふりかかる」等の動詞の与格として *rā* が用いられている。(6) *Hārūn arkān-e doulat-rā goft.* (Gol. Ⅰ) 「ハールーンは国家の柱石の臣たちに言った。」(7) *ma-rā pandī be-deh.* (Gol. Ⅰ—28) 「私に忠言を〈下さい〉!」(8) *pedar-rā az in hāl āgahī dādand.* (Gol. Ⅰ—3) 「父にこの有様を知らせた。」——同一文中に、対格、与格の両方が来る場合、最後の二列の如く、与格を *rā* によって示し、対格には *rā* を付加しない。あるいは、対格に *rā* が付加されるときは、与格は前置詞 *be* 等によって表出される。つまり、同一節(文)内で、与・対格両方に *rā* が同時に用いられることはない。(9) *bozorgī-rā porsidam az sirat-e exvān-e safā.* (Gol. Ⅱ—44) 「<sup>たいじん</sup>大人に〈清浄の兄弟〉の性質について私は尋ねた。」(10) *yaki-rā az molūk kanizakī čini āvardand.* (Gol. Ⅰ—40) 「ある王に支那の少女が贈られた。」(11) *bāzargānī-rā hazār dīnār xasārat oftād.* (Gol. Ⅱ—1) 「ある商人に千ディナールの損失がふりかかった。」——その他、第一章「王者の行状」では、次のような動詞とともに *rā* が用いられている：*pasandidan* 「の気に入る」; *xabar kardan*, *e'rām kardan* 「知らせる」; *mosallam šodan* 「<sup>くだ</sup>降る、服従する」; *ma'lūm šodan* 「知られる。」

一般に *rā* と前置詞 *be* とは相互交替可能ではあるが、場所を示す与格には *rā* は用いないとされている。次の二例では一見 *rā* が処格 (locative) 的に用いられているかのようであるが、実はそうではない。(12) *dar-e mīr o vazir o soltān-rā bī vasīlat*

ma-gard pirāman. (Gol. I)「貴族, 宰相, 王侯の門辺に紹介状を持たずに佇むな。」  
 ——これについては53頁で詳論したい。(13) zar'-rā čūn rasīd vaqt-e derou  
 (Gol. VII-5)「畑に収穫の時が来ると, ……」は, むしろ「畑は, 収穫の時が来ると,  
 ……」であって, zar'-rā は処格的ではない。

ただし, 比喩的な表現として, 次の項に見るように, 動詞 āmadan の主語が特に感情をあらわす語であるとき, 与格として rā が用いられる。すなわち,

[IV] <——rā ~ āmadan>「——に~が来る → ——は~になる, する。」  
 (14) malek-rā 'ajab (xašm, tabassom, rahmat, etc.) āmad. (いずれも Gol. I)  
 「王は驚いた(立腹した, ほほえんだ, 憐れんだ, etc.)。」

[V] 中期ペルシア語で用いられる「~のために」の意味に rā が使用された例はきわめて少ない<sup>5)</sup>。(15) Nūšīn-rā dar šekār gāhī seid kabāb kardand……(Gol. I)「狩りで, 正義のヌーシン・ラワーンのために獲物を焼肉にする際に……」

[VI] 非人称構文の意味上の主語として —— この場合のパターンは <——rā ~ bāyestan>「——にとって~が必要である」か, <——rā ~ šāyestan>「——には~がふさわしい」である。(16) pādešah-rā karm bāyad. (Gol. I-6)「国王には寛大さが必要である。」(17) 'ālem-rā na-šāyad ke safāhat az 'āmī be-helm dar gozarānad. (Gol. VIII-50)「智者たるものは愚者の愚かさをおとなしく見のがすべきでない。」(18) mā-rā xeradmandī kāfi bāyad ke tadbīr-e mamlekat-rā be-šāyad. (Gol. I)「我々には, 国家を管理するにふさわしい賢者が大いに必要である。」

\*                     \*                     \*

以上、『ゴレスターン』における, 種々の rā 構文を見てきたが, 今一つ, rā の用例として注目したいものがある。例えば Gol. I-40 にみえる次の如き文における rā の解釈のしかたである。(19) tešne-rā del na-xāhad āb-e zorāl / nīm-xord-e dandān-e gandīde. 「渴者だとして, <sup>しみず</sup>清水でさえ欲しはしない。臭い口で飲みかけのものなら。」

H. Jensen は「我々が属格構文を用いるところに, ペルシア語では, しばしば与格が来る」と言って, この文の前半部を引用し das Herz des Durstigen begehrt nicht klares Wasser と訳している<sup>6)</sup>。もちろん, 意味上からはそのように解することになんら異論はないが, 書き手の気持からすれば, この場合, rā は tešne 「渴者」を主題的に強調せんがために文頭に出したものと解釈すべきであろう。その理由はこうである。

〈del 「心, 意向」 xāstan〉は「欲する」の意味に, 複合動詞的に用いられる。例えば (man) del-am mi-xāhad (ke) anjā be-ravam. は I want to go there. (*lit. My mind wishes to go there.*) であるから, tešne-rā del na-xāhad……は, tešne del-aš na-xāhad……(-aš は his にあたる接尾代名詞) としても, 文の綾には変りがないといえよう。動詞 na-xāhad の文法上の主語は del(-aš) であり, tešne はいわば心理的主語である。そして問題の rā はこの心理的主語を強調せんがために用いられているものと解釈すべきではなからうか。以下, これに類する rā の表現を『ゴレスターン』に求めて, rā の本質的な性格を探ってゆくこととしよう。(20) yaki-rā del az dast rafte būd va tark-e jān karde. (Gol. V—4) 「ある人が失望して, 生きる望みを失った。」——この文で yaki 「ある人」を特に取り立てて言わないのなら, 属格関係にして, del-e yaki az dast rafte būd…… となろう。(21) tavāngari najil-rā pesari ranjūr būd. (Gol. VI—7) 「ある吝嗇な金持ちの息子が病気になった。」——rā の機能を考慮して訳出すれば, 「ある裕福な吝嗇漢は, 〈その〉息子が病気になった。」となる。(22) yaki-rā zani sāhebjamāl-e javān dar gozašt. (Gol. V—15) 「ある人の若くて美しい妻が死んだ, ある人が若くて美しい妻に死なれた。」(23) hame kas-rā dandān be-toršī kond šavad, magar qāziyān-rā ke be-sīrīnī. (Gol. VIII—89) 「すべての人は歯が酸によってもろくなるが, 法官らは 〈歯が〉甘味によってもろくなる。」(24) kūtah-nazarān-rā bedin 'ellat zabān-e ta'n derāz gardad. (Gol. colophon) 「浅慮の士は, それ故に皮肉の舌が長くなるのであろう。」(25) to-rā mošāhare čand ast. (Gol. IV—14) 「あなたは, 月給いくらですか。」

関係詞節を伴う同様な rā の用例では: (26) to-rā ke xāne nayin-ast bāzi na in-ast. (Gol. VII—13) 「其方は, 家が蘆で出来ているから, そんなことは 〈そなたの〉遊びではあるまい。」(27) to-rā ke dast be-larzad gohar če dāni soft. (Gol. VI—9) 「手が震えている汝がだ, どうして真珠を貫くことができようか。」

これまであげた例文 (19)~(27) を検討してみると, H. Jensen の指摘している如く, rā が付加された語と次に来る語とは, 意味上, 属格関係にあることがわかる。今, (23) の前半部を例にとりて考えてみるに, (A) hame kas-rā dandān be-toršī kond šavad. なる文をエザーフェ (-e: 英語の of に相当) を用いて属格構文で表出すると, (B) dandān-e hame kas be-toršī kond šavad. となる。では, この A, B 両文の間には, どのような差異が認められるのか。49-50頁に既述したことは, この両文にも適

用することができる。(B)の属格関係、(被修飾語 *dandān*) — (修飾語 *hame kas*), の語順を逆にして、修飾語を *rā* によって文頭に出した(A)の構文には、*hame kas* を主題として先ず大きく提示しようとする書き手の心理が窺われる。従って、この両文のニュアンスを考慮して日本語に訳出するなら、(A)は「すべての人は歯が酸でもろくなる」であり、(B)は「すべての人の歯は酸でもろくなる」となる。

さて、(A)における *rā* の機能を考えてみるに、この小辞は、日本語の「は」(係助詞)と同様、主題提示の役目を担っていることは明らかである。

*hame kas-rā dandān be-torši kond šavad*  
すべての 人は 歯が 酸で もろく なる

この日本語は、いわゆる「二重主語構文」である。この特殊な構文の特徴として、文頭位を占める主題部を除去しても完全な文として成立し得ることが指摘されるが、この点においても両言語は一致している。このような、*rā* によるペルシア語の構文に対しても、二重主語構文なる呼称は適切を欠くとはいえないであろう<sup>7)</sup>。

ところで、(A)の *hame kas-rā dandān* に対して、(B)の *dandān-e hame kas* は文の成分から見て、主語にあたるわけであるが、このように属格関係の語群 (*Ezāfe-cluster*) が文の主語になっている場合、*rā* によってその修飾部を主題的に文頭に掲げると、二重主語的構文が現出することになる。それゆえに、(19)~(27)の文も多かれ少なかれ、二重主語構文の性格を帯びているといえることができる。

因みに、二重主語構文といえば、このように *rā* によって主題を文頭に掲げる構文のほか、*pedar gūš-aš sangin ast* 「父は耳が遠い。」のように、二個の主語を並置させ、第一主語を文頭に、そしてそれを受けた接尾代名詞(ここでは *-aš*)をもつ第二主語を直後に配した構文もあり、これも一種の二重主語構文と言えるであろう<sup>8)</sup>。この文を属格関係にして、*gūš-e pedar sangin ast* 「父の耳は遠い。」とも言い得るが、この両文の差異はすでに述べたことから明らかであろう。

このような二重主語構文を特色づけている基本的素因は、二つの主題(主語)の間に属格関係=所有関係、または包摂関係=「全体」と「部分」の関係、が成立することを前提条件とすれば、主題となる語を聞き手にまず最初に提示するのにどうしても必要な文頭という位置に存するのではないか。話者の、聞き手に対する主題提示への気持の先走りが文頭に第一主語を置かしめる誘因となっていると考える。それゆえに、文頭の主題要素に付く後置詞(助詞)の *rā* や「は」は副次的機能を担っているにすぎない。*rā* や「は」は文頭の要素が主題であることを、より明確にする手段である。従って、

pedar # gūš-aš sangin ast. のように pedar と gūš の間に後置詞的なものが必ずしも来なくてもよいわけである。「休止」が <sup>ポーズ</sup>rā や「は」に代って機能していると考えられるのである。(28) xorāki # če peidā mi-šavad.(リングフォン会話テキスト)「たべものは何がありますか。」——この文を助詞を用いず、「たべもの、何がありますか」と言っても、そこに二重主語的性格を窺うことができる。これを、語順を逆にして、če xarāki ……「どんなたべものが……」とすれば、二重主語構文としての提示的機能が失われるであろう。

ところで、このような主題となる語は必ずしも文の主語であるとは限らない。例えば、(29) ġazā če be-xoram? (リングフォンテキスト)「食事は、何をたべようかな。」においては、文頭の ġazā「食事」は be-xoram? 'shall I eat?' の目的語になっている。この文のように単語を孤立的に並べるだけでも文頭位を占める語には、主題語としての性格を感じとることができる。

近世ペルシア語は、この文のように孤立語的性格を持った言語であるが、孤立語としての古典中国語(漢文)についても同様なことが指摘される。例えば、青取之於藍而青於藍(荀子)、における文頭の「青」は主題語(文の目的語になっているが)である。従って、訓読の際に、(青<sup>ハ</sup>之ヲ藍ヨリ取りテ……)の如く、助詞「は」を用いることによって、「青」が主題語であることを表出しているが、原文には、「は」にあたる助詞がないことはいうまでもない。文頭位が「は」の機能をはたしているといえる。

さて、rāに戻るが、この小辭は、あたかも日本語の係助詞「は」と同様、文頭に立つ主題語を明確にしていることを、今まで見てきた。そして、属格関係の語群(Ezāfe-cluster)が文の主語となっているとき、その修飾部を rā を用いて文頭に主題的に提示すると、二重主語構文になることは、すでに 51 頁に指摘したが、この Ezāfe-cluster が文の目的語になっている場合にも、rā によってその修飾部を文頭に、主題的、強調的に掲げることができるのである。例えば、(30) <be-dast āvardan-e donyā honar nīst.> / yaki-rā, gar tavāni, del be-dast ār. (Gol. VII-11)「<この世を手中に納めることはすぐれた技ではない、>もし汝出来ることなら、一人を、その心を <→一人の心をば>とらえ給え。」——属格関係によって、この文を書きかえると、(30)' del-e yaki-rā, gar tavāni, be-dast ār. となる。しかし、(30)の如く、yaki-rā と yaki「一人」に rā を付けて、文頭に掲げているのは、書き手が、del よりも、yaki をまず聞き手に注目させるためであろう。この構文は二重主語文に対置した、いわば「二重目的構文」である。『ゴレスターン』では、このような構文はごくまれであるが、古い作

品にはしばしば見出される<sup>9)</sup>。

さらに, Ezāfe-cluster が文の副詞的要素になっている場合にも, 同様なことが指摘される。(31) sayyādi za'if-rā māhi-ye qavi be-dām andar oftād. (Gol. III—23) 「あるか弱い漁師だが, 彼の網に力の強い魚がかかった。」——sayyādi za'if「か弱い漁師」を主題語として, 特にとりたてて言う必要がないのなら, エザーフェによって, (31)' māhi-ye qavi be-dām-e sayyādi za'if andar oftād. と属格構文になろう。このような見方をすれば, 48-49頁に保留をつけてあげた文例 (12) dar-e mir o vazir o soltān-rā bi-vasilat ma-gard pīrāman. においても, 書き手が〈dar-e……〉を rā によって主題的に文頭に掲げたものと解釈すべきである。この文を普通の文に直すなら, (12)' pīrāman-e dar-e mir o vazir o soltān bi-vasilat ma-gard. となる。形式的には (12) は, (12)' の前置詞的に用いられた pīrāman 'around' の目的語にあたる語句〈dar-e……〉が文頭に出た構文とみることができる。しかし (12) においては, 話者の心理からすれば「……の門」が主題として強く提示されており, その瞬間から, pīrāman はむしろ動詞 gaštan と組んで複合動詞「うろつきまわる」の意味に理解されている。もちろん, pīrāman<M. P. pērāman <\*pari-yāman- が本来は副詞であることも考慮したい。よって, rā の機能を活かして (12) の文を訳出すれば, 「貴族, 宰相, 王侯の門は, 紹介状なしにうろつきまわるでない。」となろう。

以上のように, 属格関係にある語群 (Ezāfe-cluster) が文の主語, 目的語, あるいは副詞相当語句のいずれに該当している場合でも, rā は, その語群の修飾語——すなわち, 「所有者」, または部分に対する「全体」——を主題的に文頭に出す際に, 主題語に添えて用いられているのである。従来, rā は格表示機能を有したものと考えられているようであるが, このような主題提示の機能は「格」の観点からでは十分に説明しえないのではなからうか。

一般に, 「格」について論じる際, 古代ペルシア語やギリシア語, ラテン語のような, 名詞の曲用によって格を明示し得る言語と, 中国語や現代英語のような, 語順や意味的な地位によって格が決定される孤立語的言語を同列に取扱うことには多少の問題があるといえる。

近世ペルシア語は後者の言語に属する。ペルシア語は, 中期語の段階ですでに, かつての曲用 (Inflection) を喪失してしまって, 孤立語的性格を呈するに至っている。このようなペルシア語にあって, rā (その歴史的背景については 59 頁参照) は, 格表示の機能を持つ必然性がない。事実, 現代ペルシア語において, rā は目的語を示すとい

われていても、それは必然的なものでなく、rāがなくても文脈上、目的語であることが決定されるのである（一般に目的語が不定の場合）。

では、与格表現における rā はどうであろうか。『ゴレスターン』に関する限り、文例(1)～(18)に見たように、意味上与格となる語句における rā は、対格語句における rā のように、付加されたり、されなかったりするようなことはない。それは、与格的表現における rā がその語源的意味合い「～のために、～にとって」を多少とも保持しているためとも考えられる。しかしながら、他の作品においては、例えば、つぎのような文例(A～D)がみられるのである；(A) Omar-rā in soxan 'ajab āmad. 「オマルはこのことばに驚いた。」(B) Omar hadīs-rā 'ajab āmad. 「オマルはその話には驚いた。」(C) peigāmbār-rā ān tadbīr-rā xoš āmad. 「予言者には、その方策は気に入った。」(D) mosalmānān 'ajab āmad. 「ムスリムたちは驚いた。」

(A) は従来の rā の解釈からすれば、最も妥当な形といえる。(B) では、しかし、逆に、本来なら rā の付加されるべき Omar に、その rā がみられず、次の hadīs にそれが付加されている。(C) における ān tadbīr-rā の rā はなくてもよいところである。また(D) では mosalmānān に rā が付加される方が、より一般的な構文といえる（49頁の例文(14)参照）。

このような実例に接すると、与格的表現においても必ずしも rā が要求されるとは限らないことがわかる。もっとも、対格の場合に比して、その使用の随意性はより限られているようであるが。

いま一つ、rā には「格」からは説明しがたい使用例がある。それは次のような副詞的表現である。šāb-rā 「夜間には」；sobh-rā 「朝には」；rūz-rā 「昼間には」の如きであり、さらに、rā は副詞（句）にも付き得ることは注目すべきで、šābāne-rā 「夜には」（šābāne=*adv.* 'by night, overnight'）；tā āxer-e sāl-rā 「年末までには」（tā āxer-e sāl='till the end of year'）の如きがそれである。šābāne や tā āxer-e sāl は、それ自体副詞（句）であるから、rā はなくてもよいわけである。

このようにバラエティーに富んだ rā の使用例——主題提示の rā、対格語の rā、与格的表現の rā、副詞（句）につく rā ——に接すると、rā は文のあらゆる要素に付き得る可能性があることになり、却って、この小辞は格を表示しているとは言い難くなる。

山田孝雄博士が日本語の助詞「は」を格助詞としてではなく、<sup>かかり</sup>係助詞として分類したように、rā も、格を表示する後置詞ではなく、「限定」、「抽出」等の機能を持った係助詞的な存在とみなすべきであろう。rā は文脈によって決定されている格に、何らかの

意味合い——つまり「限定性」——を付与しているといえる。それゆえに、やや極論に走るきらいはあるが

与格+rā=「に」+「は」→には/対格+rā=「を」+「は」→をば  
副詞要素+rā=副詞(句)+「は」→

e. g. ～ においては, ～ までは, ～ には

としても、ある分野では、こういった完全な対応を両言語に指摘することができるのである。

ところで、こういった rā の、「は」的機能から、当然考えられるのは、rā が文の主語に付加される可能性についてである。厳密に文法的な主語に付された rā<sup>10)</sup>は『ゴレスターン』では稀であるが、皆無ではなく、さらに古い作品では時々見出されるようである。また、文法的にみて完全に主語と言いきれないにしても、意味上明らかに主語とみなすべき語に rā が付されることは、しばしば見られるところである。(32) agar hosūdān be-ğarz gūyand šotor ast va gereftār āyam, ke-rā ġam-e taxlis-e man dārad. (Gol. I—16)「もし私を妬む者らが偽って、〈私が〉駱駝だといって、捕えられでもすれば、一体誰が私を逃がしてやろうと心砕いてくれようか。」——この文では、動詞 dārad ‘he has’ の主語としての ke ‘who?’ に rā が付いている。(33) sagi-rā loqmei hargez farāmūs/na-gardad, var zanī sad noubat-aš sang. (Gol. VIII-74)「犬くというもの〉は決して一口の餌を忘れまい、たとえ汝が彼を百度石打とうとも。」——この文の動詞 farāmūs gaštan は自動詞的表現である (cf. farāmūs kardan, *v. t.* ‘to forget’) から、〈loqme-ye sagi hargez farāmūs na-gardad……〉 ‘the bait of a dog is never forgotten……’ *i. e.* ‘the bait is never forgotten by a dog……’ と解釈するのがより論理的であろうが、話者の心理としては、あきらかに sagi を主語として rā によって提示していることが感知できるのである。(34) to-rā ke dast be-larzad gohar ċe dāni soft. (Gol. VI—9)「手が震えている汝がだ、どうして真珠を貫くことができようか。」——この文の rā は関係詞節内の dast と関係して dast-e to の to を文頭に出したもの(50頁例文(27)参照)と考えられるが、同時に dāni ‘thou knowst’ の主語でもあろう。

『ゴレスターン』以外の作品から引用してみると；(35) gūyand ke malek-e ċin-rā sī sad šast nāhit dārad. 「支那の王は360の諸国を領有しているということだ。」<sup>11)</sup> (36) vei-rā pāre-i kāğez be-kār dāst. 「彼は紙片を用いた。」<sup>12)</sup> (37) in do kūh-rā andar kotobhā-ye Batlamiyūs mazkūr ast. 「この二つの山はプトレマイオスの書物

ペルシア語の後置詞-rāについて

のなかに述べられている。』<sup>13)</sup>

以上、rā の付加された主語的要素に対する述語動詞は、いずれも純然たる他動詞ではなく自動詞の性格を有したものである。他動詞における主語に rā が付加されるか否かには多少問題が残る。しかしいずれにせよ、主語的要素に rā の付き得ることも、いままで論じてきた rā の機能からすれば、容易に首肯することができる。

これまで、rā の現われる種々のケースを取扱ってきたが、そこから導き出される rā の共通した機能として、次のことが結論的に言えるであろう。すなわち、rā の本質的機能は、文の種々の要素——目的語、間接目的語、主(題)語、副詞(句)——を他と区別して限定、具体化したり、あるいは主題的、強調的に抽出することである<sup>14)</sup>。格表示でなく、限定表示の機能を rā に認めることによって、rā の機能を最も広範囲にわたり合理的に説明することができる。

\* \* \*

さて、このような rā の機能と密接に関連することとして、rā を添加された語(群)の、文中に占める位置に注目したい。

一般に、文頭位は文中位や文尾位より、そして文尾位は文中位より重要度が高いといえる。これまでの引用例からわかる如く、rā の付いた語(群)が文頭位を占める傾向があるが、このような傾向は、「は」的機能を持つ rā の性格と大いに関連性がある。rā ができるだけ文頭に近づこうとする現象は、逆に言って、rā が主題提示の機能を有していることの裏付けになるともいえるのである。

もちろん、〈～rā〉が文中位に来たり、文頭位に次いで重要度の高い文尾位にも置かれることは、韻文のみならず、散文においてもしばしば見られるところである。

そこで、次は、対格語に付された rā をも、その文中における語順とともに、検討してみることにしたい。

『ゴレスターン』では、rā はできるだけ文頭に近づこうとする傾向を見せている。例えば yaki az molūk-rā に対して yaki-rā az molūk や、次文のように関係詞ではなくその先行詞に rā が付加される現象において、そうである。(38) ān-rā ke to rahbarī konī gom na-šavad. (Gol.) 'One whom thou guidest, does not go astray.'——このように目的格に立つ関係詞の先行詞が主文の主語になっている場合、その先行詞に rā を付加するのは現代語においても、ごくふつうにみられる。

英語の〈目的語—目的補語〉は、O. Jespersen の用語を借りれば、Nexus 関係——主語と述語の関係——にあるわけであるが、こういった構文における目的語に rā が要求

されるのは、主題提示の機能をもつ *rā* からすれば、けだし当然のことである。(39) *va hič kas-rā bar zamin pedar-e xod ma-xānid.* (マタイ伝 23—9)「また地上の誰をも自分の父と呼んではならない。」(40) *tavāngarzāde-rā didam bar sar-e gūr-e pedar nešaste.* (Gol. VII—18)「金持の息子が父の墓の縁に坐っているのを私は見た。」——同様に、(41) *zālemī-rā xofte didam.* (Gol. I—12)「ある暴君が眠っているのを見た。」——この文を (41)' *zālem-e xofte-i-rā didam.* として、この両文の差異を英訳によって示すなら、前者(41)は 'I saw a certain tyrant sleeping.' であり、後者(41)'は 'I saw a sleeping tyrant.' である。(41)では、*rā* は *zālemī* を主題的にとりだしているため、それだけ *zālemī* と *xofte* 'slept' との間に、主語—述語の関係がより強く感じられる。(42) *qāzi-ye Hamadān-rā hekāyat konand ke bā na'lband-e pesarī sarxoš būd……*(Gol. IV—7)「ハマダーンの法官が若い蹄鉄師に迷い……ということだ。」——*ke* を関係詞 'who' にとれば、この文は 'They tell of a judge in Hamadan, who was……' であろうが、*ke* を接続詞 'that' とすれば、*ke*—節 (*that*—節) 内の主語が *rā* によって文頭に掲げられた構文とも解釈できる。'They tell (*i.e.* it is said) that a certain judge of Hamadan was……' である。このような構文は『ゴレスターン』の物語 (*hekāyat*) を導入する際に、よく用いられている。次の第一章、第一話の冒頭の文もこれに類する構文である。(43) *pādešāhī-rā šenidam be-koštan-e asīrī ešarat kard.* 「ある王が捕虜を処刑するように命じたということである。」

また、次の例文の如く、接続詞を越えて文頭に出る目的語には提示的な語調が強く感じられる。(44) *čūb-e tar-rā čonānke xāhī pič/na-šavad xošk joz be-āteš rāst.* (Gol. VII—10)「生木は、思いのままに曲げることができようが、乾けば火でなければ矯めることはできまい。」

このように、目的語に付された *rā* にも、その文頭という語順と相俟って、やはり主題提示への働きが感知せられる。

\* \* \*

これまで引用した例文は、主として『ゴレスターン』(13世紀)からであったが、現代語では、*rā* はどのように機能しているのだろうか。目を現代語に転じて、*rā* を検討してみることにしよう。

現代ペルシア語の文章語からは、*rā* はもっぱら対格語に付いて、この小辭の機能が単に対格表示にすぎないような印象を与える。例えばイランの小学校教本六冊に、対格

語以外の語に付加された rā の用例を求めたが、私の目にとまった限りでは、ほんの数例にすぎなかった<sup>15)</sup> (詩文は除く)。もちろん、現代語においても詩文や文語調の文章には、つまり文体的には、与格的表現として rā が用いられることはいうまでもない。

それでは、文章語に対して話し言葉においてはどうかだろうか。リンガフォンの会話テキストを資料に、注目すべき rā の使用例を引用してみよう。(45) …… , čün dar bahār āhūhā-rā ābestan-and. 「春には、カモシカはみごもっているから。」—āhūhā-rāの rā には、「カモシカはといえど……」といった、他と区別して「カモシカ」を特記しようとするニュアンスが感じられる。(46) mābaqī-rā xodā karīm ast. 「〈ほかにも多くのことがあるが、これらのことが大切です〉ほかのことは神が寛大である(→何とかなる)。」(〈 〉内は筆者による文脈の解説。以下同様。)

次のような文例では、目的語についた rā は、単なる対格表示というよりは、「は」的意味合いを感じさせる。(47) baqī-rā xod-at behtar mi-dāni. 「〈召使に昼食になにを摂るか尋ねられた主人がいくつか食物名をあげてから〉あと君のほうがよく知っている。」(48) in gard-rā, vaqti manzel rasidid, tūye yek estekān-e āb-e garm be-rizid, meil bo-konid. 「この薬は、家に帰ったら、湯の入ったコップに注いで、飲んで下さい。」(49) Šāhnāme-rā Ferdousi nevešte ast. 「『王書』はフェルドウシーが書いた。」—これらの rā は、いずれも対格語に付されたものであるが、とりわけ主語や接続詞を超えて文頭位を占めている点において、提示性を強くあらわしているといえる。従って、日本語訳でも「を」よりは「は」の方が語感に、よりよく合致するところである。

次は、以下のような副詞表現に見られる rā について考えてみよう。(50) čün bande emrūz-rā čandān kāri na-dāram, bā ham piyāde mi-ravim. 「私は今日はあまり忙しくないで、一緒に散歩に出かけましょう。」(51) ……vali in yeki do rūz-rā kamī dar xorāk movāzebat bo-konid. 「〈あすになればすっかり体具合がよくなるでしょう〉でも、ここ一兩日は食物に少し気をつけて下さい。」(52) emšab-rā haminjā, xāne-ye šomā mi-mānam. 「今夜は、このあなたの家にとまりましょう。」

文脈からして、(50) の emrūz-rā では、「ふだんは(多分)忙しいが、今日のところは、今日一杯は」であり、次の(51) の例では「それ以後は気をつけるに及ばないが、この一兩日中は」の気持であり、また(52) の emšab-rā は「あす以後のことはともかくも、今夜のところは」であって、いずれの場合も、そこに抽出的、排他的ニュアンスを感知することができる。そしてそれは、日本語の「は」に語感の上でも正しく合致して

いるのである。

因みに、期間を表わす語に rā の付く表現に対して、西欧の文法書は次の如き説明をしている： šab (-rā) ‘at night’——rā があれば「夜間ずっと (whole night)」, rā がなければ「夜間のあるとき」。

rā の抽出的、排他的機能からすれば、「夜」という期間を抽出して、他を(日中を)排することになり、必然的に夜の期間全体を示すことになる。また、文によっては、同様の表現でも、rā が期間全体を表わすというよりも、むしろ対比的に、ある時期をとりだして表わしているような例を見受ける<sup>16)</sup>が、これなども日本語の「は」を考えれば、うなずける用法ということが出来る。

このように、現代語においても、話し言葉の世界では、rā が「は」の機能を十分発揮していることが今や明らかとなった。現代語で、例えば教科書の文のように論理を前面にうちだし、考え込んだ文章からは、上に挙げたような rā の使用例を見出すことは困難であるが、それも今まで見てきたように、微妙なニュアンスを付与する rā の特性からすれば、当然のことに属する。G. Lazard は、「rā が子音で終わる語に付くとき、その子音 r を失うのがふつうである、ex. ketāb-rā xāndam > ketāb-o/-e/-ə xundam.」と言っている<sup>17)</sup>。Lazard が指摘しているように rā がその子音を失って o, e, あるいは ə の形になると、ペルシア語の正書法からでは、それを明示しがたくなる。視覚的に書かれたペルシア語に接する場合よりも、聴覚的に話し言葉に接する場合の方が、短母音の形をとっている rā を捉え得る可能性が大になるとも考えられる。rā が、/e/ のような形で、軽く定冠詞的に用いられていることも推察できる。

\*                     \*                     \*

最後に、小辞 rā の変遷過程を歴史的に辿り、上来明らかにしてきたその特性との関係に少しく考察を加えてみよう。

rā は O. P. rādiy 「のために (on account of)」, M. P. rād (rāy) 「のために (in behalf of)」の新しい形である。O. P. rādiy は rād- の処格で、属格を支配する後置詞として用いられ、avahyarādiy 「このために」の如き結合形でよくあらわれる<sup>18)</sup>。また中期ペルシア語では、O. P. の意味を継承した im čīm rād 「このために」、čē rād 「何のために」などの表現に見られるほか、さらに、gōbēt kū 《man rād asp zēn sāčēt tāi man šavam……》(Ayyātkār-i Zarērān) 「彼は言った『私のために馬に鞍を付けよ、出発できるように』と」における如く、ethical dative 的ニュアンスをより強く感じさせる rād の用例も見られる。こういった rād が後の rā における種々の与

格表現の出発点になっていることは言うまでもない。さて、このような歴史的背景をもつ rā に、本論文が指摘してきた限定化機能が何時、如何にして生じたのであろうか。〈～のために→～にとって→～には→～は〉といった〈始原的意味→与格的表現→限定機能〉の発展過程が意味的に一応考えられるが、こういった変遷の時期をどこに設定すべきか。近世ペルシア語(N.P.)の段階では、その当初から与格語よりも対格語に rā がより多く付されている言語事実から、その初期においてすでに、rā の限定機能が十分確立していたとみなすべきであろう。従って、限定機能への発展過程を、時代的にさかのぼらせて、M.P. 期に設定するのが妥当である。現に、M.P. において、rād が対格語に添加されることも、ある程度指摘されるところであり、また作品によっては、本論文で取扱った文頭に主題語を取り出す rā の機能が rād にも認められる<sup>19)</sup>という。このように M.P. の段階で、すでに rād の限定機能の芽ばえが窺えることも事実のようである——もっとも、この小辞の始原的意味から限定機能発生に至る過程を解明するには、例えば、rād をもたない二重主語的構文<sup>19)</sup>と rād をもつ二重主語的構文との関係如何というような、困難な課題が横たわっているが——。しかしいづれにせよ、N.P. 期においては、すなわち rā の段階においては、この小辞に限定機能の存すること、またそれが rā の本質的機能であることには、異論の余地がないのではなからうか。

近世ペルシア語では、rā の語源的意味は、それ自体に rā を包蔵している複合前置詞 ba-rāy-e や単一前置詞 az、あるいは az bahr-e などの前置詞句によって表現されるようになり、また与格は be, bā 等の前置詞によってより明確に表現されるようになったために、相対的に、対格語に付く rā がますます優勢となり、今日では単なる対格表示とさえ見做されるに至っている(例えば、文脈を明らかにするために付加される rā)。もちろん、今日でも話し言葉においては、rā が「は」的機能を保持していることはすでに指摘した通りである。

\*                     \*                     \*

rā の機能を格表示ではなく限定表示とすることは、その機能上、日本語の係助詞「は」を rā に対置させうることになるが、その結果として、我々が「を」意識をもって接してきた小辞 rā に対して、新たに「は」意識をも持ち込むことになる。「は」意識を導入することによって、「を」(または「に」)意識をもってしては律しきれなかった rā に対して、より合理的な解釈が可能になると思われる。

最後に、motaqāreb の詩文一句を草して論旨を要約し、本論文の結びとしたい。

mar in-rā be-gūyam be-pāyān ke <rā>  
be-ma'nī-ye ān <wā> st žāpūne-rā<sup>20)</sup>

(筆者は京都大学大学院学生)

註

- 1) 『ゴレスターン』の第一章「王者の行状」に出るすべての rā を検出して、その与一対格の比率を求めたところ、与格：対格=102：81≒5：4 となった。この比率は全体的にみてもあまり変わらないようである。
- 2) ペルシア語原文の転写には、音韻転写の立場を採ったが、ε, é, ʔ, はそれぞれ、'g, q で写した。なお、ɛ = j, ɟ = i, y とする。母音は現代標準語のそれに従った。
- 3) Gol. = Golestān. テキストはモハマッド・アリ・フォルギー氏校訂のテヘラン版を使用。ローマ数字は章を、アラビア数字は物語を示す。ただし、物語の番号は、大体の引用個所を示すために本論文の筆者が便宜的に付したものである。
- 4) porsidan は be でなく az を要求する。
- 5) 「〜のために」は barāye, az, az bahr-e 等によって表出されている。
- 6) Neupersische Grammatik, Heidelberg 1931, S.222.
- 7) 在日イラン人に、「象は鼻が長い」にあたるペルシア語を求めたところ、fir-rā xortūm derāz ast. と、期待通りの文が得られた。
- 8) harvaqt mūrčei bār-aš sangin bāšad. 「蟻は、荷物が重くなるといつも……」/ Misisipi tūl-aš az hame bištar ast. 「ミシシッピ河は、長さが最大である。」/ Irānihā taqriban tamām-ešān kolāh sar mi-gozārand. 「イラン人は、そのほとんどすべてが帽子をかぶっている。」/ Mahmūd ketāb-aš gom šod. 「マハムードは、本がなくなった→マハムードの本がなくなった。」また、次のような慣用的表現が数多く見い出されるが、これら一連の表現の文頭に、名詞を主題的に置けば、ただちにその名詞は二重主語の第一主語としての資格を得るであろう (cf. Nominativus Pendens)。dast-aš kaj ast. 「手がまがっている→手くせがわるい。」/ xāb-aš sangin ast. 「眠りが深い。」/ del-aš bāz šod. 「心が開いた→ほっとした。」/ del-aš tang ast. 「心が窮屈だ→ふさぎこんでいる。」, etc.
- 9) hič xalq-rā jān na-gerefti. 「いかなる人民の命をも……」/ tā to-rā jān bar dāram. 「汝を、その命を→汝の命を……」/ 'arūs-ešān-rā dūšizegi be-bordi. 「彼らの花嫁の純潔を……」
- 10) P.Horn : Grundriss der neupersischen Etymologie, Strassburg 1893, S.134 は「その本来の意味 <〜のために、〜に関しては> から、主格に rā がつくことが説明される」と言っている。しかし、一般には、この種の rā にまで論及するのは稀れである。W. Lentz : Das Neupersische (Handbuch der Orientalistik : Iranistik-Linguistik, Leiden 1958 所収), S.202 にしても rā の機能に論及して「-rā をつけられているもの(語や語群)の内容を限定化する場合がしばしば——といっても常時とは限らないが——ある。そうした場合は、"……についていえば" という、この接辞のもつ本来の意味の弱まったものと考えられているが、そうではなくて、それを(取り出しして)具象化したものである」といい、例文をあげて説明しているが、主格主語に付された rā には、言及していない。
- 11) Hodūd-ol-'ālam.

ペルシア語の後置詞-rāについて

- 12) Tārix-e Tabarī.
- 13) Hodūd-ol-'ālam.
- 14) 註 10 の W. Lentz : loc. cit. 参照。
- 15) ma-rā be-baxš ke rūzī to-rā be-kār āyam/rūy-e dānehā-rā māse rixtand., ba'd bā ābpāš goldānhā-rā āb dādand. また、次のような、いわば化石化した語句に rā の始原的意味が窺われる : ba-rāy-e 'for'/če-rā 'for what, why'/zīrā(-ke) (<az-in-rā(-ke)) 'because'/xodā-rā 'for God's sake'/qazā-rā 'by chance',etc.
- 16) bāmdād be-šodī……va šab-rā bāz āmadi (Tārix-e Tabarī) において, šab-rā は bāmdād 「朝」と対比して用いられている。また目的語の場合でも, それが不定であっても対比的に用いられた場合, rā をとるようである : se nafar-rā tanāb āndāxtand va do nafar-rā gardan zadand. 「三人は絞首刑にして, 二人は打ち首にした。」
- 17) Grammaire du Persan Contemporain, Paris 1957, p.14.
- 18) O.P. に関しては R. Kent : Old Persian, New Haven 1953 を参照した。
- 19) 伊藤義教授による。
- 20) 「斯くとし述べん論末に, すなわち rā は, そのいわれ, 日本語にては「は」なり, と。」